

# 末黒野

すぐるの

9月号 (通巻877号)



# 父の日

夏に入る書棚の本の位置換へて  
マリンタワーも大棧橋も夏霞  
船笛に亭午と知りぬ風涼し  
鎌倉や眼界の山滴りて  
静脈のごとき走り根夏落葉  
父の日や巖父てふ語の懐かしき  
沈黙は金とは死語や枇杷たわわ  
歳時記の雪加に栞籐寝椅子

松本三千夫

(名譽主宰)

# 苔の花

牧場を走る 獣医や九輪草  
石仏のまぶたに咲かせ苔の花  
集落の闇やはらかし夏蛙  
山積みの何れは土に夏大根  
魚河岸の路地の明るし濃紫陽花  
タグボート悠々として青葉潮  
雲割れて光まぶしや鉄線花  
雨上り僧の机の枇杷一穎  
夏安居や竹の切口水溜めて  
四阿に佇む人や薄衣  
青空の無き日続きぬ蟻地獄  
錦鯉光まとひてまつすぐに

黒滝志麻子

(主宰)

# くづし字

笛の音の調子はづれや園薄暑  
指迂るスマホの画面走り梅雨  
草笛や遠山並の濃く淡く  
木洩れ日や定家葛の花降りて  
常磐木の森の昏さや著莪の花  
へたり込む犬の上目やねぢればな  
くづし字を消して点して初蛩  
阿夫利嶺を去らぬ黒雲半夏生  
夕暮の風をたひらに山帽子  
朝立ちの仕度の忙しほととぎす  
沙羅の花ぼろりと零す愚痴ひとつ  
山帽子谷の深さのやはらげり

森

清

(副主 堯)

堯

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 鮎 膾

菅野日出子

夕食は息子の釣果鮎膾  
川沿ひのローカル線や花槐  
石垣に一瞬光る瑠璃蜥蜴  
ががんぼの思はぬ速さ閼伽井棚  
疵一つなき蜘蛛の囲や小糠雨  
下町の暗き横丁吊忍  
更衣ほのとシャネルの十九番  
薔薇咲くや男もすなる薄化粧  
端居して友の病を案じをり  
未だ壕にねむれる兄や沖縄忌

## 古 代 蓮

田中臥石

昼顔の渚の少女走り出す  
貝拾ひをり昼顔の渚べり  
飼葉遣る汗の匂ひの少女かな  
走り梅雨千葉市の森へモノレール  
杖代りの長柄の傘や古代蓮  
双眼鏡視野の蓮池花捉ふ  
花蓮の上モノレール走りをり  
足棒に古代蓮池巡りけり  
田螺禍の青田半分水光る  
鱒叩く空夕照の厨窓



# サーファー

森清信子

町川にしたたる夕日夏燕  
サーファーや朝日を捉へ波とらへ  
ゆるやかなる蛇行の流れ新樹光  
新緑や人吞まれをり染まりをり  
隠沼を隈取る油膜竹落葉  
谷風に鏝を深めぬ朴の花  
令和に入り一足飛びの猛暑かな  
カメラ狙ふ杭の翡翠ショー未だ  
蚩袋秘密ひとつを打ち明けて  
抽斗に仕舞ふ愁ひや水中花

---

# 再会

安齋久英

梅雨寒や跳ぶをためらふ番鳥  
車椅子四葩のまりに触れながら  
梅雨晴間雲が雲押すビルの間  
額縁の歪み正すや走り梅雨  
ゆくりなく友と出会ふや菖蒲園  
握る手の放し難しや額の花  
眼裏の熱き別れや花ぎぼし  
八つ橋の乾き切つたり藤は実に  
紫陽花や行きつ戻りつ裾濡らし  
緋鯉跳ね水しぶき又水しぶき

## 麦の穂

石黒興平

英連邦墓地の広やか芝青む  
歳時記の最も厚き夏に入る  
鳥容れて楓若葉の木蔭かな  
エンディングノートの余白新茶波む  
観覧車五月の空を上げ下げす  
一村の孤島となりぬ田水張り  
麦の穂の熟れ色深め大落暉  
薔薇剪りし悔いうめきれぬ一日かな  
翡翠のダイビング待つ小半日  
一竿に託す一日や鮎の川

## 夏霞

岡野里子

海の碧島の緑や雲一朵  
夏霞軋む音たて船溜り  
御赦免花島の御堂の鉄の柵  
夕さりの茅花流しや標石  
園児らの列や木香薔薇満開  
夏つばめ忍者ごつこの黒衣の児  
海底の透けて貝殻夏日燦  
常滑や夏潮返す潮位標  
夏霞遠眼差しの少女像  
椰子の葉の風に夜又めく騒雨かな

# 乙 矢集

配列は音順(当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ)



風薫る 加藤静江

風薫る明治憲法起草の碑  
海沿ひの駅舎晴れやか夏はじめ  
芭蕉庵の篋の音や著義の花  
ほえる犬芒種の月の明るさに  
音高き小流れ占めて芹の花  
・ 仙道の山百合灯り雨意の風  
あえかなる風を拾ひて甘野老

爪楊枝 小田嶋野笛

逃ぐる為の羽付け蠅の生まれけり  
爪楊枝故無く唾ふ立夏かな  
たかんなどふ手討の骸賜りぬ  
母の日の恋はれぬ母となりにけり  
かはたれの庭の明るし白牡丹  
喜寿祝がる百合の花束重しとも  
風を掴み風に掴まれ夏の鳶

豆ごはん 斉藤マキ子

老鶯や地に降ろされし鬼瓦  
緑さす孔雀の羽根の裏表  
ひろげ干す神事の衣裳梅雨晴間  
夢で逢ふ母は明るし豆ごはん  
早乙女に缶コーヒーの届きけり  
筑波嶺を遠く田植機音軽し  
少年も波も金色夏の夕

姫女苑 堺 昌子

里山の木木のせまりて菖蒲園  
折からの風留めをり姫女苑  
馬鈴薯の花休みなき風のまま  
野薔薇の花のをちこち里曲道  
桑の実を一つぶ口に里の味  
ふる里の誰彼恋し蛭狩  
日は西に暮れ残りたるあやめかな

姫早百合 高木邦雄

水輪寄せまひまひ惑ふ心字池  
万緑へ鐘の音広ぐ深大寺  
仰ぎ見る函嶺包む青葉かな  
夕されば卯波高まる稚児ヶ淵  
夕風の言問橋や夏つばめ  
父祖の地の裏の杣山姫早百合  
燦々と日の差す園や薔薇蘭けて

薔薇 今村千年

浜風の丘の洋館薔薇の風  
皇居はや濠を残して青葉かな  
立ち込むる紫雲映せり七変化  
天に紫雲地に紫陽花の薄く濃く  
どの子にも利き腕ありぬソーダ水  
万緑や老いのこころの騒ぎをり  
尼寺の画家の筆塚岩たばこ

麦 秋 及川照子

麦秋や追憶といふ旅の中  
はつ夏の海の青さやジャカラダ  
父母の世の習ひを今に天花粉  
みどりさす水の回廊白秋碑  
みどり濃く渦まく水脈や舟下り  
蚊遣火を点し安らぐ夕べかな  
廃屋の庭のにぎはひ小判草

緑さす

大川暉美

掌に掬ふ湧水緑さす  
緑さすグラスに注ぐ白ワイン  
絵タイルの舗道続くや夏落葉  
港町舗道彩る濃紫陽花  
枝折戸の内より香り柚子の花  
日の関けて風に彩散る花菖蒲  
梵鐘の余韻をのせて青葉風

ご赦免花

岡田史女

八景の一景の瀬戸首夏の町  
弁財天祀る小島や薄暑光  
丹の橋の丹の色錆びぬ花蘇鉄  
島裏のご赦免花や鉄柵に  
岩煙草古井は今も使はれて  
片減りの磴や鶯老を鳴く  
薫風や少年野球に女子一人



青炎集

黒滝志麻子選



横浜 山口 登

梅雨きざす筑波の峰の雲重し

**問ひかけに知らぬ存ぜぬ暮**

新緑に包みこまれて露天風呂

英虞湾の真珠筏に白雨かな

庭園にサンバの舞や揚羽蝶

葛切を物知り顔に講釈し

横浜 伊藤 由良

広大なる薔薇園ばらに疲れ果て

睡蓮の隙間の水の昏さかな

夏蒲団心もとなき程軽し

**乙女らの脚の長さよ夏来る**

しきたりの伽羅踏炊きて一日暮れ

梅雨空を駆け抜け友の訃報来ぬ

相模原 内田 梢

白鱈や潮の匂ひを天ぶらに

髪切つてちよつと気取つてサングラス

素つ気無く水脈引く鳥や梅雨寒し

青苔の青艶めけり小糠雨

玉入れの児等の歓声風薫る

**百年の酒屋ずしりと夏暖簾**

横浜 梅田 武

**二杯目は弟が先豆の飯**

共白髪筍飯をしゃくしゃくと

天心へ鎧脱ぎすて今年竹

雨男なりし兄の忌桐の花

腕白に負けぬ眩しさ椎若葉

水色のこれと決めたり更衣

横浜 池谷 鹿次

断崖の白灯台や夏つばめ

捨て舟の傷みしままや大西日

**田植笠赤児は籠に遊びをり**

万緑や硫黄の匂ふ強羅駅

暁の山頂に聞く遠郭公

父と子の酒の肴は刺身烏賊

横浜 有賀 鈴乃

**シテの衣の所作にきらめく新能**

灯さるる大樹背に薪能

船上や尾を振りあぐる鯉のぼり

薔薇の風路面電車は窓開けて

傷みたる薔薇の香りや風渡る

夏蝶のつかず離れずラベンダー

横浜 横路 尚子

**一陣の風や大樹の朴散華**

青葉闇の赤き仁王の睨みかな

結界の先は万緑苔の磴

夏霞湾に行き交ふ船あまた

校門に傘を手に待つ梅雨入かな

薔薇園に正午の汽笛氷川丸

横浜 高橋 正江

初夏や新元号の風わたり

**瘦せ我慢して余所行きの更衣**

伽羅路を煮るや厨の香ばしき

薔薇一本卓に飾りて誕生日

風薫る森や陛下の散歩道

木洩れ日に光るせせらぎ杜若

横浜 渡辺 富士子

大杉を大蛇のごとく藤の花

春雷の一閃瞬時耳に手を

大空は若葉の帳深呼吸

新調の背広の皺やさつき雨

アカシアの花の古刹や百羅漢

**青蘆の触れ合ふ潮目雲流る**

横浜 榊山 智恵

屋根青き文学館や風薫る

**建物もアートの一部麦の秋**

柿の花話遮る二機のへり

鐘楼の茅葺き厚し五月晴

川沿ひの渋滞の道花は葉に

吊橋を渡りて涼し大井川

# 耕 土 集

森清 堯選



頬寄せて私語の花咲く船遊び  
干し竿に触るれば湿り梅雨兆す  
十葉の百の明かりや御堂裏  
鯉の池に育つ金魚や身の太き  
入梅の空気に香あり重さあり

横浜 市川 夏子

まなざしの遠く遠くへ初夏の海  
更衣形見の帯の結び癖  
途切れたる会話をつなぐ新茶かな  
浅酌のあとの一膳豆御飯  
知らぬ間に団扇の落ちて夢の中

横浜 吉原ひろ子

紫陽花の海の藍より濃かりけり  
ダンディーの日傘を選ぶに迷ひけり  
梅雨入りやゼブラゾーンの傘の列  
アロハシャツ議会の席にちらほらと  
閑かさやぼとりぼとりと夏椿

横浜 平野 秀子

法善寺の不動の鎧苔青し  
立ち入れぬ百舌鳥古墳群草茂る  
仁徳陵滴る山としか見えず  
夏草や古墳守りたる供の塚  
緑さす生家を訪ぬ晶子の忌

川崎 木村 純子

櫂ゆると潜る丹の橋草蒲園  
白無垢の映る水面や花菖蒲  
銭亀やすつと二寸の首伸ばし  
恙無き喜寿の小宴薄暑光  
検問の国境の寂虹立ちぬ

横浜 松橋 輝子

あかあかと海の日の出や梅雨の晴  
茅葺きの屋根を浸きて柀の花  
田をつなぐ小さき木橋梅雨ぐもり  
玉砂利を踏む音かろし蛇の影  
縁近く座して薄茶や滝見茶屋

横浜 小原 紀子

# 金銀花

小川玉泉

(名誉顧問)

大雨去り大風過ぎぬ松の芯  
物置の屋根を黄に染め金銀花  
思はざり鉢の藤房地をなづる  
玉石の陰にかくれて振れ花  
しもつけの花地境のにぎにぎし  
アガパンサスすつくと西日受けてをり

雑記帳 26

いまだかつて、遭遇したことの無い大雨に、日本列島は襲われた。地球に生きている身にとって、自然に勝つことは不可避である。自然との付き合いを大事にしていきたい。